総合科目「多言語・多文化社会論（歴史）」　2007.4.19.

「日本における多言語・多文化社会の歴史（1）」

米谷匡史

◆Ⅰ、多言語・多文化社会としての「日本」

多言語・多文化社会としての「日本」の歴史
「歴史」「主体」「権利」の問題を批判的にとらえる視座が必要。
単に「文化の多様性」を賛美するような風潮には問題がある。

近代の国民国家・帝国主義の成立とともに「内国植民地化」されたアイヌ・沖縄の歴史。
その主体と文化に刻まれた傷痕。奪われた権利の回復の問題。
「自己決定権」「脱植民地化」「自立」の問題を欠落させたまま、多言語・多文化の「共生」をうたいあげることの危うさ。

◆Ⅱ、国民統合の論理の変遷

①近世・幕藩体制――日本型華夷秩序
中華－夷狄の論理。異文化として差異化しながら服属させる。
異民族を服属させることが、前近代的な権威の象徴となる。
○松前藩――「蝦夷」（アイヌ人）を服属させる。
和風の言語・文化を禁じる。
○薩摩藩――「琉球王国」を「附庸国」として服属させ、「奄美」を直轄支配する。
石高制の導入、キリスト教の禁令などはおこなうが、文化・風俗は差異化して服属させる。
cf．苗代川――豊臣秀吉の朝鮮出兵の時、連行された朝鮮人陶工の村。
朝鮮の文化・風俗を保持することを義務づけられる。

②近代・国民国家――同化政策
周辺化・差別しつつ、徹底的に同化政策をおこなう。
○アイヌ人――「北海道旧土人保護法」（1899 年）
○沖縄人――「生活改善運動」、「標準語励行運動」（方言札）、「改姓」

③現代――多文化的な統合の論理への転回？

独自の文化を認め、「多文化日本」のなかへ包摂しつつ、権利要求は否認・抑圧する。

○「アイヌ文化振興法」（1997 年）

「アイヌの人々の民族としての誇りが尊重される社会の実現を図り、あわせて我が国の多様な文化の発展に寄与することを目的とする」（第１条より）

アイヌ人の独自の「文化」の保持・発展を認めつつ、「先住権」（土地・資源の権利、政治的自決権、民族としての参政権など）は否認。

「文化」を生活・主体・権利から切りはなしたまま、「博物館」に展示する「文化財」のように管理・統制する。

○「沖縄ブーム」――自然・文化の商品化と消費、「海洋リゾート」の演出

沖縄の自然・文化を、消費される商品として広告業界・観光（航空）業界が演出。

1975 年　沖縄国際海洋博覧会。　　1992 年　首里城復元。

ドラマ・音楽・料理など。　　2000 年　沖縄サミット。

しかし、「内国植民地化」の歴史は忘却され、基地問題をめぐる異議申し立ては否認・抑圧される。

◆Ⅲ、沖縄人の「同化」＝「日本化」――特に「本土」在住沖縄人の情況

◇1920～30 年代　大不況・ソテツ地獄 ⟶「本土」・海外へ移民

大阪（大正区）、横浜（鶴見区）などに沖縄人街が形成される。

きびしい就職差別・賃金差別にさらされ、植民地民族と同様に扱われる。

沖縄の言語・文化を自己否定し、「同化」＝「日本化」することを迫られる。

「生活改善運動」「標準語励行運動」。沖縄の学校では、子供の首に「方言札」。

cf．冨山一郎『近代日本社会と「沖縄人」』（日本経済評論社、1990）

「沖縄にたいするこうした差別的な扱い、固有の伝統文化にたいする蔑視や抑圧は、言語にかぎらず、日常生活のあらゆる風習にわたって、政策として行われたのだった。生活改善運動と称して、県の学務部が学校や青年会を指導し、琉球的風俗の絶滅を期したのである。それは朝鮮や台湾における皇民化運動とまったく同じであった。

そこから、さまざまな悲喜劇が生れたのはいうまでもない。何よりも、沖縄人自身のなかに、郷土的なものにたいする蔑視が生まれ、劣等感が植えつけられていった。東京に出てきて小市民的な生活をいちおうきずき上げた男が、郷愁にかられて沖縄民謡のレコードを入手してきたが、それを聞くときは、雨戸をしめきって蓄音機に毛布をかぶせ、その中に頭を突っこんで聞いた、というような笑えぬ話もある」

（比嘉春潮・霜多正次・新里恵二『沖縄』岩波新書、1963）

・関東大震災――朝鮮人虐殺。「日本語」が流暢に話せない沖縄人も迫害される。
・沖縄戦――沖縄語を話す者は「間諜」とみなして「処分」。

◇戦後・アメリカ占領期（1945～72）
戦後初期には自治・独立論も盛ん。日本統治からの解放として受けとめられる。
帰属論争（自治・独立／「日本復帰」／アメリカ統治）
冷戦・朝鮮戦争 ⟶ 1950年代の米軍基地拡張、土地の強制収用、人権抑圧
「日本復帰運動」へ急速に傾斜していく。
「日本国民」としての教育。「方言札」の復活。
1950年代後半～「本土」への集団就職。

◆Ⅳ、「沖縄人」の自己回復・主体形成

◇「反復帰論」・沖縄自立論の台頭（新川明・岡本恵徳・川満信一ほか）
1970年前後、「日本復帰運動」に見られる「同化志向」を内部批判。
「沖縄人」を呪縛する「国民国家」・「日琉同祖論」への批判。

◇「沖縄青年同盟」の「ウチナーグチ裁判」（1972年2月）
「国会爆竹事件」（1971年10月19日）
沖縄での批判を無視して強行される沖縄返還協定の批准に抗議。
アメリカの単独支配から、日米提携による共同管理体制へ。
「在日沖縄人」に自覚・決起をうながす。
裁判闘争で、「ウチナーグチ」を使用し、沖縄は日本なのか否かを問う。

◇「日本」のなかで「沖縄人」になること
沖縄人の離散（ディアスポラ）
ホスト社会における「同化」と「異化」のディレンマ
cf．仲間恵子「ヤマトゥのなかのウチナーンチュ」
（『いくつもの日本Ⅴ　排除の時空を超えて』岩波書店、2003）

◆参考文献

・（新訂･増補版）『高等学校 琉球・沖縄史』（東洋企画、2001）
・新崎盛暉『沖縄現代史』（岩波新書、2005）
・小熊英二『〈日本人〉の境界』（新曜社、1998）
・冨山一郎『近代日本社会と「沖縄人」』（日本経済評論社、1990）
・冨山一郎『戦場の記憶』（増補版：日本経済評論社、2006）
・冨山一郎「ナショナリズム・モダニズム・コロニアリズム――沖縄からの視点」
（伊豫谷・杉原編『講座 外国人定住問題１　日本社会と移民』明石書店、1996）
・近藤健一郎『近代沖縄における教育と国民統合』（北海道大学出版会、2006）
・藤澤健一『近代沖縄教育史の視角――問題史的再構成の試み』（社会評論社、2000）
・藤澤健一『沖縄／教育権力の現代史』（社会評論社、2005）
・森宣雄「東アジアのなかの沖縄の日本復帰運動
――台湾・沖縄・韓国の脱冷戦・民主化運動」（『IMPACTION』103 号、1997）
・大城立裕『同化と異化のはざまで』（潮出版、1972）
・平恒次『日本国改造試論』（講談社現代新書、1974）
・新川明『反国家の兇区――沖縄・自立への視点』（新版：社会評論社、1996）
・新川明『沖縄・統合と反逆』（筑摩書房、2000）
・多田治『沖縄イメージの誕生』（東洋経済新報社、2004）
・秋山勝「植民地的経験と沖縄近代」（『沖縄大学地域研究所紀要・年報』6 号、1995）
・仲里効「言葉が法廷に立つ時――1972 オキナワ 映像と記憶８」
（『未来』469 号、2005 年 10 月号、『オキナワ、イメージの縁』再録、未来社、2007）
・仲間恵子「ヤマトゥのなかのウチナーンチュ」
（『いくつもの日本Ⅴ　排除の時空を超えて』岩波書店、2003）
・屋嘉比収「沖縄の標準語励行の歴史」
（大阪人権博物館『ヤマトゥのなかの沖縄』2000 年）
・高良勉「闇の言葉を解き放て」（『青い海』1983 年 8 月号）
・戸邉秀明「「在日沖縄人」、その名乗りが照らし出すもの」
（同時代史学会編『占領とデモクラシーの同時代史』日本経済評論社、2004）
・渋谷研「改姓と同化される名前」（『アジア遊学』53 号、2003 年 7 月）